

蟪 蛄 考

広 戸 惇

蟪蛄（かまきり）は、新撰字鏡によれば、伊比保牟志利。伊比保は同書に疣とあり、疣の古形である。蟪蛄を捕えて疣をむしり取るまじないに用いたものと思われる。柳田国男氏に「蟪蛄考」があり、当時の不備な方言分布状態の中で、まことに的確に結論を導き出している事は驚ろく外はない。新撰字鏡から約30年後に出た倭名類聚鈔（931年）には以保無之利となり、いひぼ→いぼとなっている。類聚名義抄（1081～1100年）はイヒボムシリ、イボムシリ、イホムシリ。新猿楽記（1058年）にはイボジリ、イモシリとなって、梁塵秘抄（1192年）にはイボウジリとなる。こうしてそれ以降、下学集、節用集にはイボムシリ、イボムシ、イモシリという三つの語形が現われる。一方漢語からの輸入による蟪蛄が色葉字類抄（～1180年）に記載され、文献の上では撮攘集（1454年頃）、つまり室町時代中期頃にはじめて「かまきり」の名称が現われる。さて、カマキリの名称はどこに生じ、どこから京都に侵入し、今日の共通語となったかということである。今、日本言語地図、瀬戸内海言語図巻、拙著中国地方五県言語地図をながめて、その分布を調べてみる。中国地方は、山口県は殆どカマキリ、広島県西部はカマキリ、東部はカマタテ、岡山県西部カマキリ、東部カマタテ、共にカマタテが古いという。山陰地方には鳥取、島根両県にカマカケが広く分布。さて日本言語地図には、石川県西部、福井県東部にカマタテがある。文献によれば、運歩色葉集（1548年）にカマムシが記載されている。京都の北方にカマ（鎌）を持つ語形、それはカマタテ、カマカケ、カマムシのいずれかは不明であるが、そうした名称が京都に室町初期に侵入、カミキリ虫という別の名称をとり入れカマキリが生じたものと考ええる。